

地域においてMSMのHIV感染・薬物使用を予防する支援策の研究 令和2年度総括・分担研究報告書

研究代表者 樽井正義

(H30 - エイズ - 一般 - 004)

令和3年3月31日

研究代表者：樽井 正義(特定非営利活動法人ぶれいす東京 理事／慶應義塾大学 名誉教授)

研究分担者：生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京 代表)

大木 幸子(杏林大学保健学部看護学科 教授)

若林 チヒロ(埼玉県立大学健康開発学科健康行動科学専攻 教授)

研究要旨

本研究は MSM の HIV 感染と薬物使用の予防および HIV 陽性者の支援を促進することを目的とし、4つの分担研究を行う。本年度は3年計画の3年目である。

(1) HIV 陽性者の生活と社会参加に関する研究

(若林チヒロ)

(2) 精神保健福祉センターにおける MSM および HIV 陽性者への相談対応の現状と課題に関する調査

(大木幸子)

(3) ダルクにおける MSM・HIV 陽性者支援の調査

(樽井正義)

(4) MSM における薬物使用に対処する啓発・支援方策に関する研究

(生島嗣)

(1) HIV 陽性者生活支援策の基礎資料の作成を目的とする本調査は、2003年より5年毎4回目となる。本年度はブロック拠点病院に都内診療所の外来患者の調査票も加え集計分析を行った。CD4値は改善され、服薬と通院の健康管理負担も減少し、恋愛や結婚などの人間関係や社会生活上の制約感の軽減が初めて見られたが、精神健康度は変わらず低いことが示された。高齢期の介護サービス利用については、費用と介護者の HIV 理解への不安が見られた。

(2) 精神保健福祉センターにおける相談事業調査の分析では、HIV 陽性者の薬物相談において担当者がもつ自己効力感は、施設における回復プログラム実施の有無、担当者自身の相談経験の有無に関連が見られ、また相談経験があるほど HIV に関する認識が高く、セクシュアルヘルス相談への抵抗感が低いことが示された。これらを踏まえて、相談担当者研修用の教育媒体を作成した。

(3) ダルク調査結果の回答者への還元と薬物使用者と HIV 陽性者の支援者への面接により、陽性者への支援向上のための HIV、医療、社会的支援に関わる情報の共有、薬物使用者の感染予防促進のための連携の必要性が確認された。HIV 診療医療者に向けたパンフレットには、健康問題である薬物使用への理解を促すメッセージ

を掲載し、併せて当事者と関係者が安心して利用できる相談窓口と情報サイトを紹介した。

(4) 若年 MSM に向けて HIV 感染と薬物使用の予防情報を発信する web サイト、Stay Healthy and be Happy に、HIV 感染に関連する薬物等の依存の契機が身近にあることに気づかせる事例集と、自分の日常のコミュニケーションの仕方を振り返るセルフチェックシート、その使用方法を紹介する動画とを作成し掲載した。web サイトへのアクセスは年間 1 万回を超えた。

A 研究目的

本研究は MSM の HIV 感染と薬物使用の予防および HIV 陽性者の支援を促進することを目的とし、4 つの分担研究は次のことを本年度(3 年計画の 3 年目)の目的とした。

(1) HIV 陽性者の生活と社会参加に関する研究(若林)

HIV 陽性者を対象とした質問紙調査「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果を分析して、その健康管理と社会生活に関する現状を明らかにし、支援体制整備の基礎資料を得る。

(2) 精神保健福祉センターにおける MSM および HIV 陽性者への相談対応の現状と課題に関する調査(大木)

精神保健福祉センター調査結果の分析をもとに、精神保健福祉センター職員を対象として HIV 感染症と陽性者支援に関する研修媒体を作成し HIV 感染症の診療機関、HIV 陽性者の支援機関との連携を促進する。

(3) ダルクにおける MSM・HIV 陽性者支援の調査(樽井)

薬物依存症回復支援施設ダルクにおける MSM を含む性的少数者および HIV 陽性者の受け入れの現状と課題に関する質問紙調査の分析結果を踏まえて、MSM の HIV 感染と薬物使用の予防に資する支援策を検討する。

(4) MSM における薬物使用に対処する啓発・支援方策に関する研究(生島)

若年の MSM や男性と性行為を行うトランスジェンダーを対象に立ち上げた web サイト Stay Healthy and be Happy を通じて、HIV 感染と薬物等への依存の予防に役立つ情報を届け、コミュニケーションスキルの向上に資する。

B 研究方法

(1) HIV 陽性者調査を 1 年目に準備、2 年目に実施し、ACC とブロック拠点病院の外来患者から回収された調査票について中間集計を行ったが、本年度は都内クリニックの外来患者から回収された調査票も加えて、全体を集計し分析した(n=1,543)。調査票に含まれる 4 項目に関する自由記述(累計 1,583)を内容に即して整理し、その一部の原文を、個人情報に配慮して提示した。

(2) 精神保健福祉センターについて 1、2 年目に施設調査と相談担当者調査を実施し、それぞれに集計したが、本年度は両者を結合して、担当者が HIV 陽性者からの相談を受けた経験や自己効力感について分析した(n=85)。その結果をもとに、HIV 陽性者の薬物相談の背景情報となる HIV 治療の現状とセクシュアリティに関する基本的情報を主内容とする相談担当者研修用教育媒体を作成した。

(3) ダルクにおける性的少数者と HIV 陽性者の受入の現状と課題について 1、2 年目に実施した調査の結果を、本年度はダルクに還元し、意見を求めた。またダルクと陽性者支援団体の職員に面接調査を行い、陽性者と薬物使用者の支援策を検討した。さらに薬物使用者への理解を促すパンフレットを、とくに HIV に関わる医療者に向けて作成した。

(4) 若年 MSM に HIV 感染・薬物使用予防情報を発信するために 1、2 年目に制作した web サイトに、本年度は多様な依存に関するリアリティの喚起をはかる事例集を作成して掲載した。メディアに web サイトの取材を求め、ネットニュース等へ記事掲載を依頼した。さらに、MSM が自分の日常のコミュニケーションの仕方を振り返るセルフチェックシートと、その使用方法を示す動画とを作成し、web サイトに加えた。

(倫理面への配慮)

各研究分担者の所属機関、また陽性者調査については調査が行われるエイズ治療拠点病院等の各 IRB に審査を申請した。陽性者調査は無記名であり、回答の郵送をもって参加への同意とみなす。精神保健福祉センターとダルクでの調査では個人情報収集しないが、面接調査に際しては、説明の上同意書を取得した。

C 研究結果

(1) 陽性者調査から、CD4 値が高い人 (>500/μl) の割合が 52.7% とこれまででもっとも大きく、服薬と通院の健康管理負担も軽減されて、性生活や恋愛、結婚、人間関係に関連した項目では初めて改善が見られたが、精神健康度が悪い人が変わらずに多いことが示された。HIV 感染に関わる近年の知見である U=U を知っているのは 56.6%、PrEP は 47.6% だった。高齢者が増え、65 歳以上が 13.2% を占めた。高齢期の生活に備えをしている人は 24.2% (「かなり」2.0%、
「ある程度」22.2%)、していない人は 75.9% (「あまり」37.6%、
「まったく」38.3%) で、介護サービス利用について費用と介護者の HIV 理解への不安が見られた。自由記述の設問には、差別偏見の経験は 212 票、高齢期の生活は 479 票、薬物については 425 票、他の陽性者や一般の人々に伝えたいことは 467 票の回答が寄せられた。

(2) 精神保健福祉センターの施設と職員の調査の分析では、HIV 陽性者の薬物相談において職員がもつ自己効力感は、設置主体やその職員規模とは関連がなく、施設における回復プログラム実施の有無、職員自身の相談経験の有無に関連が見られた。また相談経験があるほど HIV に関する認識が高く、セクシュアルヘルス相談への抵抗感が低いことが示された。これらを踏まえて、相談経験がない段階から職員の準備性の向上がはかれるよう、研修用媒体(DVD)「知っておきたい HIV/AIDS のこと」を作成し、HIV とセクシュアリティの基本的知識に加えて、HIV 陽性者のリアリティが伝わる情報と支援のイメージが持てる内容を組み込んだ。

(3) ダルク調査結果の還元とともに送付した質問紙に、半数の施設(27/54)から回答を得て、施設での

HIV 陽性者の支援向上のために、HIV、医療、社会的支援に関わる情報と学習の機会が求められていることが示された。ダルクと陽性者支援団体各 2 名の職員への面接から、陽性者支援と HIV 感染・薬物使用予防に向けて、今後の情報の共有と支援における連携の必要性と可能性が確認された。HIV に関わる医療者に向けたパンフレット「身近な人から薬物使用について相談されたら 3」には、健康問題である薬物使用への理解を促す 4 つのメッセージを掲載し、併せて当事者と関係者が安心して利用できる相談窓口と情報サイトの電話番号ないしウェブアドレス、計 35 か所を紹介した。

(4) MSM への予防啓発資材として、5 人の当事者(20-40 代)の協力を得て、HIV 感染に関連した依存(薬物、アルコール、人間関係(共依存)、ギャンブル)の契機が身近にあることに気づかせる事例集を、イラストを添えて制作し web サイトに掲載した。事例集は 4 つのメディアで紹介され、web サイトへのアクセスは年間 1 万回を超え、5 つの事例で計約 3 千回、内 2 つの薬物依存の事例は各 1 千回以上閲覧された。また、自分の日常のコミュニケーションの仕方を振り返るセルフチェックシートを、臨床心理士の協力を得て作成し、その使用方法を紹介する動画を、若年ゲイ男性に影響力をもつ 2 人のユーチューバーの出演を得て制作し、web サイトで公開した。

D 考察

(1) 陽性者調査では、高齢期に HIV 治療を受けつつ介護サービスを利用して地域生活を送ることへの不安が示された。60 歳代は回答者の 1 割だが、50 歳代は 2 割を占め、高齢期対策の検討が課題となる。精神健康度が悪い人が多いことに変化はなかったが、性生活や恋愛、結婚、人間関係に関連した項目では改善が見られた。その背景に PrEP の普及、U=U 等の情報の広まり、LGBT への社会的認知等があるとも考えられるが、PrEP と U=U を知っている人は半数前後にとどまる。自由記述に寄せられた回答の一部は報告書に収載したが、全体の紹介については別途検討する。

(2) 精神保健福祉センターの調査により、HIV 陽性者の相談に HIV 感染症、陽性者、セクシュアリティに

関する知識が有用であることが示唆された。自由記述において、これらの知識の不足を補う機会が、さらには HIV 陽性者および薬物使用者への支援の方法や経験の共有が、多くの職員から要望された。精神保健福祉センターと HIV 陽性者の医療機関・支援団体との連携により陽性者支援が促進され、地域の相談支援を含む広範な多職種協働(IPE)体制が構築されることが期待される。

(3) 薬物依存は孤立の病と言われ、回復には人とのつながりが不可欠だが、HIV 診療の場で陽性者につながる医療者が薬物使用への理解を持つことは、使用の抑制を促す一助になると思われる。また、薬事犯者の中で注射器共用経験は 70%、C 型肝炎の既往は 46%とされることから、HIV 感染の広がりが危惧され、接触が困難な薬物使用者への感染予防策として、刑務所内での薬物依存離脱指導に参加するダルクの職員の協力を得て、HIV に関わる情報を伝達することが考えられる。

(4) MSM の HIV と依存症に関する身近な事例集をネットニュースなどで情報伝達することによって、各事例 200～1,000 回の閲覧を得ることができた。事例ごとに閲覧数に違いがあるのは、タイトルによるのか、イラストによるのかは不明だが、大きな差があった。しかし、相談や支援、当事者組織に関するページに 745 の閲覧を得ることができたのは大きな成果だった。web サイトの Stay Healthy and be Happy は公開を継続し、どのような MSM 層に情報が届いたのか、どのような効果が期待できるのかを評価しつつ、内容を充実させていく必要がある。

E 結論

(1) 陽性者調査からは、CD4 値が高い人の割合が半数を超え、服薬と通院の健康管理負担が減少し、恋愛や結婚などの人間関係や社会生活上の制約感の軽減が初めて見られたが、精神健康度は変わらず低いことが示された。診療所の陽性者は、大部分が MSM という属性の違いはあるが、メンタルヘルスや社会生活の問題をもつ人の割合は、拠点病院と同程度だった。また高齢期の治療継続と介護サービスに関わる陽性者の不安への対応も、取り組まれるべき課題となる。

(2) HIV 陽性者薬物相談において精神保健福祉センターの薬物相談担当者がもつ自己効力感に関連する要因は、薬物相談全般への自己効力感、MSM に関する知識、HIV 感染症の福祉制度に関する知識、セクシュアリティへの抵抗感であった。この調査結果から、担当者に向けた HIV 感染症、陽性者、セクシュアリティに関する教育媒体を用いた研修の機会、さらには HIV 診療機関や陽性者支援団体等とのネットワーク形成の重要性が示唆された。

(3) ダルクにおいて HIV 感染症とその診療に関する情報を共有することによって、また HIV に関わる医療者における薬物使用への理解をはかることによって、陽性者の支援と薬物使用の予防を促す方策を試行した。またダルクとの今後の連携によって、薬物使用者への HIV 感染予防情報の提供を進める方途を検討することができた。

(4) 若年 MSM に向けて情報を発信する web サイト、Stay Healthy and be Happy を作成し、影響力のあるクリエイター、インフルエンサー、メディアに協力を依頼することで、情報を拡散できることが確認された。事例と支援情報をセットで提供することで、相談や支援、当事者組織に関する情報へのアクセスも促すことができた。また、自分の日常のコミュニケーションの仕方を振り返るセルフチェックシートとその使用方法の動画を作成した。

F 健康危険情報

なし

G 研究発表

研究代表者：樽井正義

1. 論文発表

1) Koto, G., Tarui, M., Kamioka, H., Hayashi, K.: Drug use, regulations and policy in Japan, International Drug Policy Consortium 2020. April 2020. http://fileserv.idpc.net/library/Drug_use_regulations_policy_Japan.pdf

2. 学会発表

1) 樽井正義、生島嗣、徐淑子、山本大. ダルクにお

ける性的少数者および HIV 陽性者への薬物依存回復支援の現状 . 日本エイズ学会、2020 年、東京 .

研究分担者：生島嗣

1. 論文発表

1) 生島嗣 . HIV 陽性者支援の現場から— MSM (男性とセックスをする男性) への支援を中心に . 松本俊彦編 , 「死にたい」に現場で向き合う 自殺予防の最前線 . 日本評論社 . 121-132, 2021 .

2. 学会発表

1) Ikushima, Y. Patterns of PrEP use among men who have sex with men in Japan. Asia Pacific AIDS & Co-infections Conference (APACC) 2020, October 15-17, 2020 .

2) 生島嗣、三輪岳史、大槻知子、山口正純、大木幸子、若林チヒロ、樽井正義 . HIV 検査と告知時期に関する考察—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から— . 日本エイズ学会、2020 年 .

3) 生島嗣、三輪岳史、大槻知子、山口正純、大木幸子、若林チヒロ、樽井正義 . HIV 陽性と就労に関する考察—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から— . 日本エイズ学会、2020 年 .

4) 生島嗣 . 地域における HIV 検査—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から . 日本公衆衛生学会、2020 年 .

研究分担者：大木幸子

1. 学会発表

1) 大木幸子、生島嗣、樽井正義 . 精神保健福祉センターにおける HIV 陽性者への薬物相談対応の現状 . 日本エイズ学会、2020 年 .

2) 大木幸子、若林チヒロ、斎藤可夏子、生島嗣 . 40 歳以上の HIV 陽性者の将来の介護希望場所と関連要因—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から— . 日本エイズ学会、2020 年 .

3) 大木幸子 . 高齢期の備えと関連要因—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から (第 3 報) . 日本公衆衛生学会、2020 年 .

研究分担者：若林チヒロ

1. 学会発表

1) 若林チヒロ、池田和子、杉野祐子、谷口紅、中濱智子、東政美、生島嗣 . HIV 陽性者の基本的属性—「HIV 陽

性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から (第 1 報) . 日本エイズ学会、2020 年 .

2) 山口正純、三輪岳史、大槻知子、大木幸子、生島嗣、若林チヒロ、樽井正義 . HIV 陽性者における薬物使用パターンの経時的変化—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から . 日本エイズ学会、2020 年 .

3) 中濱智子、東政美、池田和子、杉野祐子、谷口紅、生島嗣、若林チヒロ . HIV 陽性者の情報の Update における課題—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から (第 2 報) . 日本エイズ学会、2020 年 .

4) 東政美、中濱智子、池田和子、杉野祐子、谷口紅、生島嗣、若林チヒロ . HIV 陽性者の高齢化と介護—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から (第 3 報) . 日本エイズ学会、2020 年 .

5) 杉野祐子、谷口紅、池田和子、東政美、中濱智子、青木孝弘、田沼順子、生島嗣、若林チヒロ . HIV 陽性者の併存疾患と受診行動—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から (第 4 報) . 日本エイズ学会、2020 年 .

6) 谷口紅、杉野祐子、池田和子、東政美、中濱智子、青木孝弘、田沼順子、生島嗣、若林チヒロ . HIV 陽性者の病名開示—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から (第 5 報) . 日本エイズ学会、2020 年 .

7) 池田和子、杉野祐子、谷口紅、東政美、中濱智子、青木孝弘、田沼順子、生島嗣、若林チヒロ . 薬害被害者の精神健康—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から (第 6 報) . 日本エイズ学会、2020 年 .

8) 若林チヒロ . 健康状態 15 年間の変化—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」 (第 1 報) . 日本公衆衛生学会、2020 年 .

H 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし